

# 犬インフルエンザ



Grasshouse

酔った帰り道、嫌な予感がした。

月明かりの下、私の後ろを、ひたひたと何かがつけてくる。犬だ。

今時まだ、住宅街に野良犬がいたのだ。私は、危険を感じた。

こんなことになってしまうとは、半年前には誰も思わなかった。このところ、鳥インフルエンザ、豚インフルエンザと、奇妙な病気が流行り、ついには身近なペットまで、新型インフルに冒されるようになった。

感染した犬は、脚をつっぱらせ、白い泡を吹き、苦しんだ後で死に至る。人体感染もあり、中国では死亡例が幾つか報告された。

愛犬家たちは、パニックに陥った。大型犬を地下室で隠し飼いしている者もいた。ついには近所で「あの家は、まだアフガン犬を飼っている」などの噂が流され、密告やスパイ行為が流行った。連日、可愛い愛犬が、何百匹も殺処分された。厭なことに、〈大切なファミリーとの思い出作り〉と称し、そんな別れを、もっともらしいセレモニーに仕立て上げる悪賢い業者もいた。「どうも、あれは某国の生物武器らしい」

愚かな陰謀論が、まことしやかに流された。鳥と豚のインフルエンザが、犬のそれとまじり合うなど、自然界では一パーセントも起こりえない——そう断言したどこかの教授が、あれからぶつぷりとテレビに出なくなったのも、薄気味悪い。

自慢ではないが、私は犬に好かれる人間だ。

子供のときから、いつも隣に犬がいた。愛人は囲えなかったが、愛犬は三匹飼った。ようやく仕事も落ち着き、マンションも手に入れ、子供たちのため、そろそろ四匹目の犬を飼ってみようかと思った矢先に、この騒ぎだ。

その夜は、リストラに遭った同僚との送別会を開いた。会社の扱いへの義憤とともに、内心、私でなくて良かったと思った。私は去ってゆく同僚に「気を落とすな。人生、なんとでもなる」と慰めた。ひそかな優越感を感じながら。

——寒い。私は、路上でくるりと振り向いた。

驚いたように立ち止まる犬。愛らしく首を傾げる。柴犬の子犬のようだ。棄て犬か。胸が痛んだ。私を見上げ、ゆっくりとしっぽを振った。駆けて行って抱きしめてやりたい。きっと餌もなく、心細いに違いない。内緒でこっそりと飼おうか。私は、身を屈め、手招きをした。犬は、嬉しそうにぴくりと耳を立て、走り出した。

その瞬間、闇の中から、ぬっと灰色の枝のようなものが伸びてきて、キャン、という鋭い悲鳴があった。子犬はたちまち空中にすくい上げられ、体を反らせてもがいている。小さな脚が、網の中からはみ出していた。

巨大な檻を乗せた装甲車のような車輛が、そこにあった。

「だいじょうぶですか。怖かったですでしょう。噛まれたりは、してませんよね」

網の中でもがく子犬を両手で抱えながら、保健所職員がいった。防護服までつけている。大袈裟な。私は怒りを感じた。

「これから、どうなるんですか、この犬」

「もちろん法に則り、適正に処理されますので、ご安心ください」

何の罪もない子犬を、明日には殺処分するというのだ。秋の月夜の下、私は力なくとぼとぼと歩いた。哀しかった。虚しかった。人間のエゴによって飼われ、エゴによって棄てられ、殺処分される動物たち。彼らは何も悪くない。今夜は風呂から上がったら、しみりとビールを飲もう。

あの哀しい子犬の瞳のために――。

しばらくすると、再び檻付の装甲車のような車が、のろのろと背後から近づいてきた。驚いたことに、今度は防護服だけでなく、マスクに手袋という完全装備で降りてきた。

「すみません。運転手がね、さっき貴方が犬に頬を舐めさせてたというのです」

職員が二人、私に詰め寄った。

「まさか。人違いですよ。私はその犬に、つけられてたんだ。ずっと逃げてきた。むしろ被害者です」檻に入れられた子犬が、私を見ていた。

「事実だけを話してください。貴方、犬好きでしょ。長年の勘で分かるんです」

「い、いや、触れてませんよ絶対に。何を言い出すんだ。どんな証拠があって」

激しいやりとりを聞いて、年配の運転手まで降りてきた。

「あのね、見てしまったのですよ。貴方があのチビを、撫でているのを」

二人の保健所職員に取り押さえられた私は、哀願した。

「どうなるんです、私。会社も、家庭もあるのですよ。わが家は、すぐそこのコンビニの先で……」

「しばらく隔離され、厳密な検査を行います。社会秩序の安定のためなので、ご協力いただけませんか。ご家族には、こちらからご連絡します。今後の身の処し方もありますしね。とりあえず、現場写真を撮らせてもらいます」

職員は脇からデジカメを取り出した。

私は、強引に正面を向かされ、犯人のように撮影された。

「さっきからいつているでしょう。犬なんて、昔から私は見るのも嫌なんです。飼ったことすら、ありませんから！」

例の子犬が一声、高く鳴いた。月光に照らされた犬たちの黒いシルエット。

男たちにねじ伏せられ、捕獲されたみじめな私を、檻に閉じこめられた犬どもが、黒い瞳でじっと見ていた。

<了>

## 犬インフルエンザ

<http://p.booklog.jp/book/26526>

著者 : Grasshouse

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/grasshouse/profile>

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/26526>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/26526>